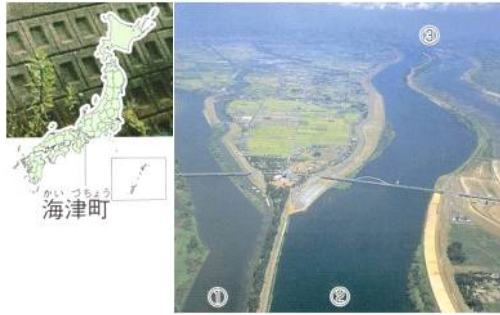
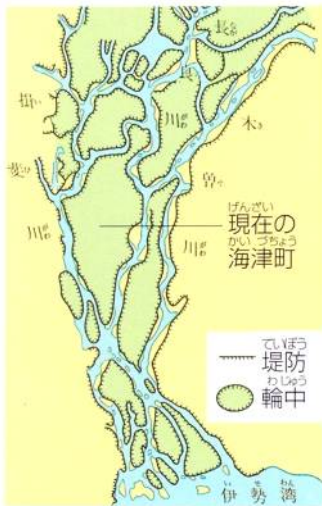


濃尾平野ってどんなところ？



西から揖斐川をかき長良川、木曾川渡って名古屋に着いたよ…ハァー、チョンチョンと。

昔の木曾三川

濃尾平野の「濃」は岐阜県南部にあった昔の美濃国を表し、「尾」は尾張国を表しています。

この平野には、木曾三川といわれる(1…①の？川)・(2…②の？川)・(3…③の？川)の3つの川が流れ、下流にはこれらの川が運んできた土砂でできた三角形の大きな土地の(4…漢字で)が広がっています。

そして、この地域は土地が低いため、洪水だけでなく、海水も入り込んでくることになやまされてきました。そこで、水害から家や田畑を守るために土地の周りに堤防を築きました。このように周りに堤防で囲まれた土地を(5…漢字で)といいます。



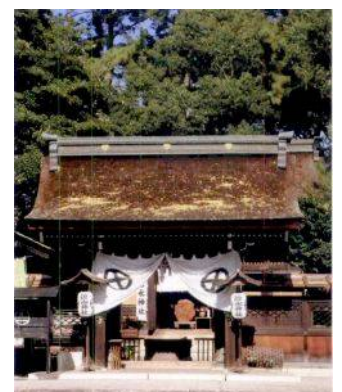
洪水とのたたかい

木曾川東岸の愛知県側に堤防が築かれた後も洪水は続きました。そのため、江戸時代に江戸幕府から命じられた今の鹿児島県の(6…ひらがな可)藩が、三つの川の流れを分ける工事を行いました。この藩は大きな犠牲をはらってこの仕事を行ったのです。

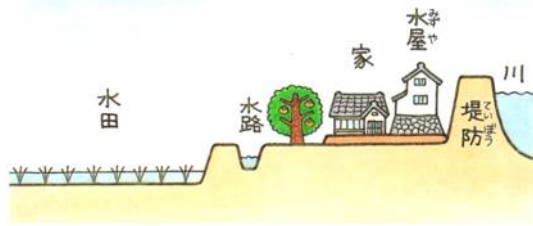
右の(7…？神社)にはこの工事のときに犠牲になった人たちがまつられています。

そして、この工事が完成したのは明治時代になってからです。海面よりも低い土地をもつ(8…チューリップや風車で知られる外国)から技師が招かれ、25年もの月日を費やしてやっと工事が完成しました。このときの施設は今も大切なはたらきをしています。

また、(9)県の海津町では、海よりも低い土地が多く見られるため、今も整備工事が続けられています。



水屋って何?…洪水に備えて



輪中では、堤防がくずれて水が入ると、排水がむずかしくてなかなか水が引きません。そのため、人々は土を積み上げて盛り土をし、石垣を組んで家全体を高くつくるようにしました。そして、さらに高いところには(10…漢字で)とよばれる避難用の建物を造りました。しかし、こうした建物を持つことができたのは一部のお金持ちだけで、多くの農民は助命壇(別名を命塚という)とよばれる高い土地や高いところにある神社に避難しました。現在では、土地の改良や工事が進んだため、こうした建物はほとんど残っていません。

家に備えられた舟

輪中では田の土を掘り、掘った土を積み上げたところに稲を植えました。また、土を掘ったところは溝になり、小さな川とつながった多くの水路がつけられました。そのため、この地域の人々の移動手段には(11…漢字で?舟)が使われていました。昔の農家はこうした舟を1~2せきもっており、洪水から避難するときにも使われていたのです。



輪中の今

今から約60年前に土地の改良が進められ、揖斐川などの川底を掘った土で輪中の内側の水路を埋め立て、(12…?ポンプ)でいらない水を取りのぞきました。

こうして、今では海津町一帯に水田が広がっています。さらに、水はけの悪い土地

には、小さな穴のあいた管をうめ、そこから排水する(13…?排水)という方法で、土地を水田と畑の両方で使えるようにしました。今は木曾三川に大きな橋がかかり、愛知県の県庁所在地の(14…?市)などの大都市と行き来がしやすくなっており、海津町は自動車で大都市に通勤できる便利な町になっています。



災害は忘れたころにやってくる?

こうした努力によって、海津町では1961年以来、洪水がおきていません。

しかし、水害の危険がなくなったわけではなく、毎年6月には水防団による水防訓練が行なわれています。新しく造られた家も、周りよりも家を高くして、水害に備えた石垣のつくりが見られます。



都市の道路はアスファルトやコンクリートで舗装されているところが多く、水が地面にしみこんでいきません。そのため、集中豪雨のときなどは地下街や地下鉄などにも大きな被害が出ます。トイレや生活排水などの水を流す(15…?水道)があふれたりして衛生状態が悪くなることもあります。そのため、地下に雨水をたくわえる施設や、排水や雨水をそのまま流さずに再利用する施設をつくったり、公園を増やしたりなどの対策が検討されています。公園の樹木や土に雨水をしみこませたり水をためておく遊水地にしたりするのです。

災害を伝える

同じ自然災害が、同じ場所で何度も発生することがあります。そこで、過去にその場所で災害が起きたことを後世の人々に伝えるための石碑が建てられているところがあります。右は「今福堤防決壊の碑」とよばれる石碑です。



1896年の洪水によって、揖斐川の堤防が2度も崩れたことと、1815年にもこの場所で堤防が崩れて水害が起きたことが書かれています。

しかし、このような石碑があることを知らない住民が増えてきたため、(16…右の地図記号)という地図記号がつけられ、人々が広く知って災害に備えられるようにしています。

災害の被害を予測した地図

右は海津市で洪水がおきたときに、どの地域がどのくらい水に浸かってしまうのかを予測した地図です。

このような地図を(17…カタカナで?マップ)といいます。

予測される被害の大きさが色で分かるようにしており、避難場所やそこまでの道順などが示されています。

この地図には、洪水のほか、火山の噴火や津波などによる被害を予測したものがあります。

